CLOSE UP クローズアップ

上方の浮世絵を、道頓堀から発信

2008年6月　上方浮世絵館にて

大阪・道頓堀の法善寺門前に、塗り壁の洒落た建物がある。中には江戸・明治期の歌舞伎の舞台や役者を描いた浮世絵がずらりと並ぶ。ここは、上方の浮世絵を専門とする「上方浮世絵館」だ。館長の高野征子さん（70）は「芝居小屋が立ち並び、役者さんがそぞろ歩きしていたこの場所で、千両役者の名舞台を飾ることに意義がある」と同地に根を生やして上方文化の普及に努めている。

◇リアルな上方の浮世絵◇

江戸時代に誕生し、人々の生活や風物などを描いた浮世絵。木版画（錦絵）と肉筆画があり、江戸時代後半から明治時代初期まで主に大阪で作られたものを「上方浮世絵」と称する。上方浮世絵には役者絵が多く、江戸の浮世絵と違って美化せずリアルに写実している。

高野さんが浮世絵の収集を始めたのは20年前。「鎖国時代に生まれた日本独自の文化というものに惹かれた。お芝居の絵を見ると、舞台を見ているように日本人の義理人情の世界がひしひしと伝わってくる。この時代に庶民文化が花開いたというのはすごいことやなと思った」

その素晴らしい文化遺産を現代でも伝えていこうと、周囲の反対を押し切って2001年に私設の美術館を創設した。「相談した人100人が100人とも反対したけれど、その時は『やるんや』という気持ちが大きかった。今から考えると、そんな難しいことによう挑戦したなと思う」

◇上方文化を身近に感じられる美術館◇

上方の浮世絵版画を専門とし、展示の入れ替えは3ヶ月おき。現在は「芝居になった歴史人物列伝」（8月末まで）をテーマに、吉備真備や源頼光、小野道風、菅原道真、平清盛、毛利元就ら歴史上の名士たちを演じる歌舞伎役者を描いた浮世絵を展示している。

4階では摺り体験教室も開く。色を摺り重ねる仕組みを理解し、より深く作品を味わってもらうためだ。お茶会や生け花の展覧会なども行い、小さな美術館だからこそできることに挑戦する。「行政の援助などなく、経営は大変」とこぼすが、守り抜く決意は固い。

運営費の一助となっているのが、手ぬぐいや風呂敷などの物販だ。中でも手ぬぐいは「日本人の心」と言い、いつもうんちくを語りながら接客している。「ハンカチと違って端を縫っていないところが、日本人の知恵やなぁと思う。裂いて包帯にするなど用途は多彩にある」

◇お不動さんも道頓堀も美術館の庭◇

かつての道頓堀は、歌舞伎や人形浄瑠璃など芸能のメッカだった。まだその面影が残っていた昭和40年代、高野さんは夫と喫茶店を経営していた。「映画館がオールナイトで営業していたので、お店も夜通し開けていた。夜11時から朝8時まで働きながら二人の子を育て、寝る時間もままならない日々だった」

同じ道頓堀で、画廊を経営したこともある。すでに故郷の淡路島よりも長く過ごした街になった。「長年お世話になった道頓堀へ恩返ししたい」という思いが、美術館の創設を後押しした。2006年に発足した地元の「南地中筋商店会」の副会長も務め、月2回はメンバーで法善寺水掛不動表参道を清掃している。

「役者さんたちが踏み固めてきた足跡は、目には見えないけれど今も残っている。上方にも浮世絵という文化があったということを、道頓堀から伝えていきたい」という当初の思いは、今も、そしてこれからも変わらない。

（文・江中咲紀／写真・高島悠介）

プロフィール

上方浮世絵館　館長

高野（たかの）　征子（せいこ）さん

1938年淡路島生まれ。高校卒業後大阪へ。道頓堀で喫茶店「法善寺」を約20年、1989年から画廊「ブルーナイル」を約10年経営。2001年4月28日に上方浮世絵館創設。同年、「第4回なにわ大賞」受賞。

【上方浮世絵館】
▽開館時間＝11:00～18:00
（入館は同17:30まで）
▽休館日＝毎週月曜日（祝日の場合は翌日）
▽入館料＝大人500円、小・中学生300円
▽住　所＝〒542-0076　中央区難波1-6-4
▽電　話＝06（6211）0303